



かつて鍛冶屋が軒を連ねた面影を残す町並み

## 町並みについて

- ◆人吉市鍛冶屋町地区は、人吉城下の職人町として計画的に配置された町で、文禄3年(1594年)20代当主、相良長毎の時代に形成された町割りが現存しています。名称が示すとおり、人吉(相良)藩の軍事あるいは農林業を支えた鍛冶屋職人が集まった町であり、隣接する大工職人の大工町、染め物職人の紺屋町とともに職人町を形成してきました。
- ◆同地区の住人は鉄砲組として藩の軍力の一部を担い、人吉城主の相良氏から名字を与えられていました。また、屋敷割りは間口6間に奥行き約30間の広さで65番までの地番があり、道に面していた仕事を訪れる人々でおおいに賑わいました。



## 町並みの中心(核)となる伝統的建造物

### 立山商店

- ◆創業は1877年(明治10年)で、お茶、椎茸等を商う店舗と、見学コースとして改装した茶の蔵があります。
- ◆人吉地方に残るウンスンカルタは戦国時代にポルトガルから伝わった「南蛮カルタ」を源流とし日本で手が加えられ、江戸期に国内で大流行しました。昭和40年には熊本県重要無形民俗文化財に指定されたことから、このカルタの文化も残そうと県や市、地元住民が協力し「ウンスンカルタ保存会」を作り復興に努め、独特の文化を町並みとともに今に伝えています。



立山商店前の通り

農林業の機械化や郊外への工場の移転などによって、最大66軒が軒を連ねた鍛冶屋自体は現在2軒が残るのみとなっていますが、松炭を使う昔ながらの工法が守られています。また、工房の梁には毎年元旦に神様に捧げ、一年の豊穡を願う「鎌・矛・蔵」のシンボルが張り付けてあり、伝統を感じることができます。